2012年 3月10日
第13号

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 13号

もくじ

何故　縄文柴犬と呼ぶか？　☆JSRC　副理事長　五味靖嘉 …… 2

総会･理事会のご案内　☆JSRC 理事長 新美治一 …… 3

シバの散歩道(13) ☆JSRC 理事 根深　誠(文筆家･釣り師･元登山家) …… 4

おたよりコーナー

☆石川県･黒梅さん　☆東京都･日下さん　☆京都府･金さん …… 8
☆大阪府･有藤さん …… 9
☆長野県･肥田さん　☆京都府･永井さん …… 10
☆山形県･吉野さん …… 11
☆福島県･一ノ澤さん　福島県･稲田さん …… 12
☆富山県･竹内さん …… 13
☆石川県･黒梅さん …… 14

根深誠･藤井忠志対談講演会「白神山地が世界遺産に指定されるまで」-5 (最終回)
☆本州産クマゲラ研究会編 …… 15

事務所報告　☆会費　☆新入会　☆御寄附 …… 19
☆総会･理事会のご案内(続) …… 19
編集後記-G ☆北海道･橘さんのML投稿紹介 …… 20

登り窯1979.3
スケッチ（鉛筆）
五味　画

★2012年度の会費納入用に、郵便「払込取扱票」用紙を同封いたしましたので、よろしくお願いいたします。
★会員の方には、総会出欠の有無及び委任状を兼ねた「ハガキ」を同封しました。3月末までに投函して下さい。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター

会事務所　**郵便振替口座**　02280-2-106951
〒　014-0073　秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5　TEL　0187-68-2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

何故 縄文柴犬と呼ぶか？

JSRC 副理事長 五味靖嘉

「縄文柴犬」とは、新しい犬種ですか？「日本犬」とはどんな関係があるのでしょうか？このような質問を受ける事が多くなりました。また、東京・上野にある国立科学博物館の「日本館」に於いては、「縄文人の家族」というコーナーに縄文時代の犬がレプリカで再現されています。この犬のレプリカは、発掘された犬骨データを基に、精密に作成されたと聞きますが、私達が飼育している「縄文柴犬」と体躯構成や顔貌まで、ほぼ同じになっています。（同館絵ハガキ参照）また、芸術的に見ても、犬と人の関係を表現した素晴らしい作品だと考えます。

考古学で獣骨に詳しい金子浩昌（1984)先生は、北海道から西日本、南西諸島に至る地域で飼育されていた縄文時代のイヌは､肩の高さ36～46cm位、額から鼻面の線が､一般的な柴犬のように凹まず、ゆるやかな傾斜で伸びます、と分析しています。

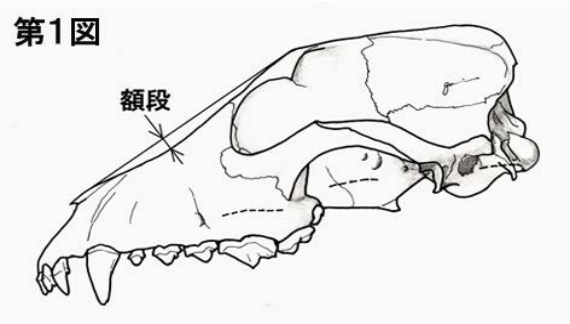
霊長類からヒトの進化を研究している茂原信生先生は、、日本犬の起源と形態の研究でも知られていますが、縄文時代のイヌの頭蓋最大長はオスが160㎜ 前後、メスは150㎜前後であり、この時代のイヌは前頭部から鼻先にかけて直線的で、額段、あるいはストップが小さい、と分析しています。

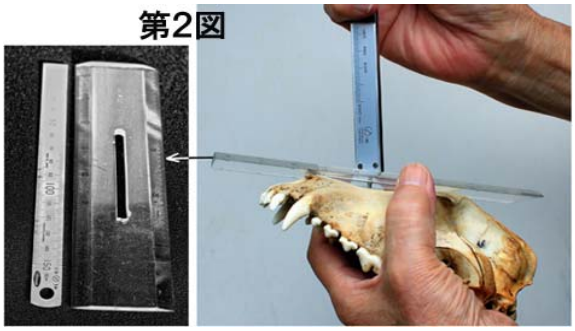
ここで言う｢額段･ストップ｣の定義を明らかにしなければなりません｡この表現は古くから様々な文献に散見しますが､具体的な計測方法と数値を示したのは茂原(1984)先生からになります｡(第1図参照)

額段･ストップの計測方法については､｢正中矢状面で鼻骨前端間の額接線から測った鼻骨最深点までの距離｡｣とします｡鼻骨は上顎骨と化骨していない場合もあるので､正しい位置に鼻骨を固定して計測する必要があります｡鼻骨が欠損した場合は計測しません｡

注記:本計測には､茂原考案の定規(第2図左)を媒体として用います｡写真右は手で頭蓋と定規を持ち､もう一方の手でノギスをコントロールした状態のものです｡

この他にも沢山の報告は見られますが、それぞれに共通して、この時代のイヌは、積極的に改良された証拠が見られず､小型の犬で､額が広く後頭部が発達し、ストップが浅く面長で､口吻部は太く頑丈である、という顔貌が､おおよそ1920年以降から、多くの研究報告などで述べられていることです。また、近年、顕著な進歩を遂げている生化学的分野の研究報告として、





ミトコンドリアDNA解析(2009)から､｢ニホンオオカミと代表的オオカミ、飼育犬のハプロタイプの比較｣(石黒直隆、いのしまやすお、茂原信生）が報告されました。この内容のニホンオオカミとイヌの分析では、それほど明確な差は生じていないと、述べられています。

明確な差があると私は思っていましたが、考えてみると犬の祖先はオオカミであると考えられるので、これは当然かも知れません。ここで､誤解のないように補足しますが、縄文柴犬（日本犬）の祖先がニホンオオカミだという意味ではありません。

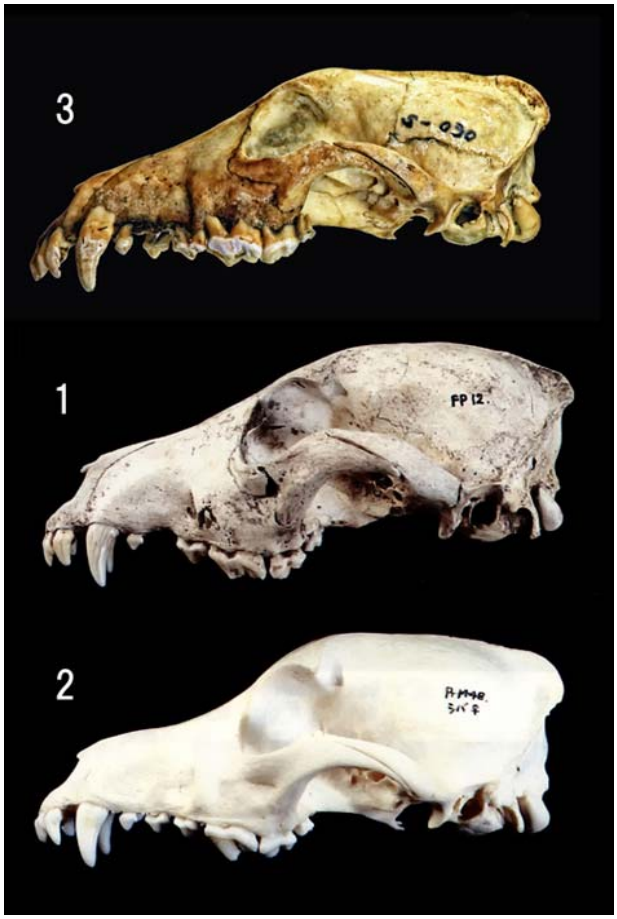
形態を言葉で書くと、分かり難いのですが、写真や図説だと明快になります。

第3図は、縄文時代のイヌ1と、一般的なシバイヌ 2と、縄文柴犬 3 を区別して理解する必要があるのです。つまり、縄文時代の犬とは違うのですが、それと相似する犬、という意味で「縄文柴犬」とし区別する必要がありました。この図ですが、 1 は縄文時代後期。 2 は現生の一般的なシバイヌ。 3 は縄文柴犬、11歳の雄です。

注目すべき額段については､1 と 2 の相違は目立ちますが､1 と 3 では区別が付かないほど相似しています。また吻部や歯牙にも 1 と 2 の違いが目立ちます。しかし、 1 と 3 では吻部に若干の違いがあるものの、

第3図

説明:1と2=茂原信生「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの」歯界展望、第70巻第6号、1987.12.15より出典。3=最近まで飼育していた「縄文柴犬(筆者蔵)」。



歯牙の大きさなどにはそれほどの変化を見る事ができません。因みに、1と3の後頭部の差は、年齢によるものです。

また、この縄文柴犬は、世界に500種とも言われる犬のなかでも、凡そ１万年前の原型に近い形態を残していると考えられ、貴重な存在であると捉える必要があります。

以上、簡単に述べましたが、こうした研究成果によって明らかになりつつある通り、新しい犬種を意味するのではない、ということは明白です。

我が国が、ユーラシア大陸から離れ島国となり温暖になった時期、地質年代では更新世の終わり、完新世の始まりの11500年前頃から縄文文化が始まったとされます。考古学上では、土器と弓矢の出現による狩猟があり、ヒトとイヌの協働が考えられるのです。今のところ、イヌの最も古い発掘例は9500年前とされています。

推測ですが、それよりも古い年代にイヌが居たと考えられます。近隣国からの、何らかのルートによって、多分ヒトとイヌが渡来した可能性があります。また、更に遡って、寒冷期の頃の旧石器時代はどうだったのでしょう。つまり、１万年より遡ったイヌの歴史については、まだ判っていません。

従って、歴史的経過を見るなら、新しい犬種ではないということと、特定の個人や団体の私有物ではないということがご理解いただけると思います。

こうした滔々と流れる歴史上の背景を踏まえ、縄文（縄紋）時代のイヌは、日本の在来犬として多面的な研究が求められると考えています。私は、縄文時代のイヌとの相似性、原種性がある、という意味に於いて「縄文柴犬」と総称し、更なる研鑽と保存が必要と考えます。そして、一人でも多くの方々の協力を得て、縄文時代のイヌの歴史を解き明かしたいと、強く感じているのです。　(2012.2.5)

総会･理事会のご案内

JSRC 理事長 新 美 治 一

昨年は、大震災の影響で総会･理事会･交流会などを中止とし、文書会議をもって決算報告や予算を決めたという経過がありますだけに、今年度は是非とも皆様のお姿を拝見しながらの会議にしたいと願っています。

ご参加をお持ちしております。

会場：仙台市泉区中央公民館　第二会議室
日時：４月１５日（日）
午前９：３０～午後４：００迄

Ⅰ **理事会＝午前**9:30～12:00
議案:総会の準備･その他

Ⅱ **総会＝午後**1:30～3:30
議案:(1)2011年度の活動報告
(2)2012年度の事業計画と予算
(3)その他

Ⅲ **その他＝**3:30～4:00

尚、詳細は19･20ページをご覧ください。

シバの散歩道 (13)

根 深　誠（文筆家・釣り師・元登山家）

犬猫看板観光旅行記　その3

夕方、西空が薄赤く染まるころ、高松駅前に着いたバスから降りると、この3月11日に発生した東北大震災・福島第一原発事故の被災者への協力を訴え、義援金を募る大学生男女数人の耳をつんざくような絶叫が聞こえる。私の友人知人にも被災者がいて胸を痛めているのだが、それとはべつに大学生のスピーカーから聞こえる音割れした絶叫はうるさい。そう思いながら、絶叫する大学生男女の前を素通りできずに小銭を入れる。それから友人のケイタイに電話を入れた。

高松駅前は何年か前に来たときにくらべてずいぶんモダンになっている。以前は、雑然とした小路を入ったところのソープランドの向い側にある讃岐うどんの専門店で腹ごしらえしたのだが、いまはその一帯に整然と立ち並ぶビルの窓ガラスが夕陽を照り返し、以前の面影は微塵もない。

友人が軽トラックで迎えに来た。いましがた仕事を終えたばかりだった。友人は奥さんと二人で造園業を営んでいる。私は友人の車で公園を二ヶ所案内してもらった。高速バスの車窓から、駅のちかくで目についた公園である。私が弘前での犬猫看板の話をすると、

「なーに、それ。そんなものないよ。弘前の人って、いかれてんじゃないの。見たことないよ。お上意識丸出し、役人風を吹かせてるんだね。ふざけた町だね。でくの坊が税金で禄を食んでるんだね、きっと」

辛辣なことを口にしながら友人は高笑いした。

たしかに、ふざけ過ぎている。葛西憲之という市長の公約は、それでいながら「対話と創造」という民主的なものなのである。

クスノキの街路樹が植えられた大通りに沿って二つの公園がある。どちらの公園にも犬猫に関する看板は一つもない。

「おかしいな、せめて注意事項の看板ぐらいあってもよさそうなものだがな。見落としたかな」

「おかしいわけないよ。おかしいのは弘前人だ。ほら、この松、見ろよ。オレが手入れしていたんだ」

公園の管理にかかわる業者が「ない」と言うのだから肯定するほかない。

私は友人と二人で石鎚山に出かけて一泊し、友人宅には二泊した。友人宅でその日、朝食をとりながら、とりあえず瀬戸内海を渡って山陽に行くにはどうすればいいか、訊いてみた。

「山陽のどこへ行くつもりよ」

「うーん、倉敷あたりはどうだろうか」

快速「マリンライナー」で岡山で乗り換えて行けばいいという。

モダンなビルが建ち並ぶ高松駅前

マリンライナーで瀬戸大橋を渡るとき、車窓に瀬戸内海の青海原が広がった。点在する島々、サクラやツツジの紅が、それらの島々を覆い包む新緑に色香を添えている。春のうららかな海原に白波を引いて船舶が航行し、いかにも壮観な海の風景である。

その一方で、列車がまるで空中へ飛び出して走っているかのような錯覚に陥り、私は緊張感から股間がむずむずして思わず手のひらが汗ばんだ。旅客機に乗りなれないころ、離陸や着陸のとき味わった心理状態に似ている。何年か前、神戸淡路鳴門自動車道を走ったときも、股間から頭のてっぺんにかけて激烈な緊張感が走った。あのときは強風で車が横揺れし、さながら緊張感で串刺し状態にされたようだった。

眼下には春の穏やかな海が広がっているのに私は気分が落ち着かない。あたりを見回すと、誰一人として私のようにそわそわしている乗客はいない。隣席のメガネをかけた女性は、文庫本を読んでいて周囲には目もくれない。慣れてしまい、周囲の景色がもの珍しくもなんともないようだ。前席の若者はむさ苦しい長髪の頭を、青白くか細い指でかきむしっている。不潔な感じがする。フケでも飛んできたら堪らない。

岡山に着くころ、雨が降りはじめた。高松の友人は、造園業という職業がら日々の天候が気にかかるらしい。私を駅まで送ってきたとき、テレビの気象情報によると倉敷は雨だそうだ、捨ててもいいから、と言って、コンビニやスーパーの店先で売っているビニール製の傘を持たせてくれたので助かった。

岡山駅から山陽本線に乗り換えて倉敷で下車。駅前の観光案内所で配布している「倉敷てくてくmap」というパンフレットには、ずいぶんこと細かに案内が記されている。私はこれまで観光ガイドに頼るような旅行をあまりしたことがなかった。それが今回の旅行では、観光案内所に行くと親切に教えてもらえるという便利な体験に、新発見でもしたかのような新鮮な驚きを覚えたのである。

ホテルの敷地内に立てられた看板

倉敷の駅前から延びる中央通の街路樹もクスノキである。西日本は照葉樹林帯であり、適地適木の生態原理に適っているのだろう。街路樹は観光文化都市には欠かせない景観的要素になっている。街路樹があると、それだけで心が和む。

翻って、わが故郷に当て嵌めれば、西日本の照葉樹林帯に対してブナ帯だから、街路樹はさしずめブナということになる。しかし、落葉が邪魔になるからという一部の市民からの苦情を理由に、市役所が街路樹や小学校の校庭に植えられた古木を切り倒した例もあり、だいぶ認識に違いがあるようだ。切り倒して済ませるのではなく維持管理し、啓蒙し続けることが大切なのではないだろうか。

はたまた市民の中には、わが家の近所でそうなのだが、平気で除草剤を撒き散らし、雑草を枯死させてい

る。これは生命環境の破壊であり、無神経極まりない、きわめて自己中心的な行為である。鳥獣のみならず、耐性が弱い乳幼児や老人にも危険である。飼犬の散歩中、観察したところ、そこの家には小学生や幼児がいるのだから、こうした除草剤を家の周囲に撒き散らすのは自殺行為に等しい。

邪魔というこじつけがましい理由をつけて、創立記念に校庭に植えられた樹木を切り倒したり、犬猫看板を設置したり、毒物を撒いたりする行為は、そのじつファッショであり野蛮である。おそらく、こうした体質に行政はあぐらをかいているのだろう。

今回、私は犬猫看板の問題がきっかけで観光文化都市と目される他郷の町々を観光客としてめぐり歩いて、私の故郷の節度のなさを痛感し、「病膏肓に入る」の感を強くした。

倉敷の美観地区を歩いていて㈱倉敷アイビースクエアの敷地内の私道で「犬の散歩はご遠慮願います」という文言の立て看板を見つけた。ホテルや文化施設を経営している株式会社だけに、弘前市役所の「犬猫の入園を禁止します」の文言とくらべて、言葉の言い回しに低姿勢な接客態度が伺われる。

倉敷川沿いに大原美術館がある。正面入口に列柱のある、その建物では生誕130年児島寅次郎展が催されていた。大原美術館の創立者大原孫三郎の片腕となり、ヨーロッパの美術品を大原の資金で買い付けた人物である。本人自らも画家だが、大原家の奨学資金で勉強し、ヨーロッパへ留学している。見学記念に買い求めた『わしの眼は十年先が見える 大原孫三郎の生涯』（城山三郎著・新潮文庫）にそのようなことが書いてあった。

大原美術館にあるエル・グレコの『受胎告知』は有名である。美術鑑賞にまったくの素人の私でさえ、なにやら西欧の質感に圧倒されるような迫力を感じた。昭和16年（1941年）に見学した堀辰雄が書いている。

「いかにも凄い絵で、一ぺんではねつけられ、しかたなく他のゴッホやロオトレックなどを一とおり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんどはやっと少し平静な気分でその絵に向えた」

（『斑雪(はだら)』）

美術館を一巡りして外に出ると、倉敷川の川べりのヤナギが春雨に濡れて淡い緑を萌え立たせている。サクラの花びらが一面に浮かんだ川面を、新郎新婦を乗せた川舟が滑っていく。修学旅行の中学生たちが、もの珍しそうにその光景を眺めていた。中には、性的興奮を覚えたのか、盛りのついた犬のような雄叫びを上げて冷やかす男子生徒もいる。思春期の属性なのだろうか。私が中学生のころとたいして変わっていないようだ。

芽生えた情炎に振り回される厄介な年頃である。やたらと大声を張り上げて話したり笑ったり、いったいなんのつもりかと中学生のころ、私は不審に思っていた。

たしか一年生のときだった。

「お前たちの中に桃色遊戯をしている連中がいる」と女の担任教師が、朝礼の時間に険悪な顔つきで説教をかました。私には縁もゆかりもない内容だった。

「そんなことをしていたら頭の血のめぐりが悪くなって勉強の成績が悪くなる。そして中毒になってやめられなくなってしまう」

私は先生の説教に違和感を禁じえなかった。先生は結婚したばかりなのに、桃色遊戯はしていないような言い草だ。もしかしたら頭の血のめぐりが悪くなりやめられなくなってしまう、とは体験談なのだろうか。もちろん質問したら、その場の厳粛な雰囲気をぶち壊してしまうだろう。

そのとき神妙な空気を破って、男子生徒が一人、クックックッと、どうにもがまんできないような押し殺した笑い声を漏らした。

先生は「キサマ」と女らしくない言葉で叫んだ。

「ないがおかしい」

周囲の生徒たちのピリピリした緊迫感が伝わってくる。おかしいからおかしいじゃありませんかと私は内心、その生徒の味方に立った。しかし、口に出してはとても言えない。

先生は泣き叫ぶような金切り声を上げて取り乱し、その生徒の頭を黒板拭きで立て続けに殴った。生徒は大粒の涙を流し、両手で頭を抱え込んでいた。逃げればいいのに、と私は思った。

「キサマたち、先生がまじめに話しているのにちゃんと聞いているのか。いいか、よく聞け、桃色遊戯したいなら大人になってからしろ」

先生は壇上で、腰に両手の拳を押し当て、仁王立ちになって乱暴な言葉で訓戒を垂れた。

先生が教室を出て行ってから、私は大丈夫か、と生徒の頭を見ると黒板拭きの白い粉が付着し、複数のコブができていた。その生徒とは家へ帰ってからも遊んでいた仲なので性格も知っていたし、桃色遊戯の当事者でないことはたしかだ。私はその女教師にえげつないアダ名をつけた。アダ名は先生が他校へ転勤になっても影のようについて回った。

倉敷川の川舟に乗る新郎新婦

私は頭をボコボコにされた生徒と下校中に話し合った。あの先生は女の顔をした男ではないかと。あの先生は、映画で見たことのある、熱帯の密林に裸で男を従えて暮らす女軍隊「キャバンテツ」だと。

いま思えば、あの当時、けっこうおもしろい先生がいた。そして、その先生にアダ名をつけて生徒も愉しんでいたのだった。

※　　※　　※

倉敷で降っていた雨も姫路まで来ると上がっていた。駅前から姫路城へ向かう大手前通の並木も印象に残る。まだ季節が早く、木々は芽を出す前だった。イチョウもあるが、例によってクスノキが占めている。後日、横浜の山下公園にも足を運んだのだが、そこにもクスノキがあった。これはいったいどういうことかと私は考えた。

クスノキは西日本の照葉樹林文化を象徴する樹種である。東北地方のブナ帯の文化形態が縄文であり、そのブナ帯文化を象徴する樹種はブナである。東北地方で見られる街路樹はケヤキが目につく。とくに仙台のケヤキ並木は有名である。大館にも立派なケヤキ並木がある。私の故郷の弘前でも最近、街路樹にケヤキを植えている。ヒマラヤスギの並木もある。このヒマラヤスギの植栽は、場所が土手道であることから防風防雪をかねてのことと思われる。おそらく、落葉しないぶん重宝がられているのだろう。

ケヤキは主に関東地方で多く見られ、日本海側の北部でもないわけではないが珍しい樹種である。ここで問題は、私の故郷の津軽地方においてなぜ、ブナが適地適木の生態原理に適った樹種であるにもかかわらず街路樹や、公園や学校や家庭の庭木など、日常生活の場に植栽されなかったのかという点にある。私の大胆な推理によると、樹木はもとより、その背景をなす自然からつむぎ出された文化もまた侵略、蹂躙されて跡形もなく破壊された歴史の結果ではないか、ということに尽きる。

これは、私の故郷の人たちの隷属的な思考様式と大いに関係がありそうだ。東京を「中央」といまでも呼び、その中央の人たちから「無口で忍耐強い」と言われて、自らそう思い込んで得意然としているのだからおめでたい。

どうも私は、故郷をネガティブに捉えすぎるきらいがあるようだ。しかし、そのような風土であり気質でもある。